

カンキツ園での鳥類の被害と防止対策について

近年、清見など中晩柑類を中心として、鳥類（主にヒヨドリ、カラス、メジロ）による被害が増加し、深刻な問題となっている。一般に、被害防止対策として、視覚や聴覚刺激などを利用して追い払う防鳥機や防鳥資材などが使われているが、その効果については不明な点が多い。そこで、果樹園周辺での鳥の発生経過や被害の実態および防鳥機や被覆資材の利用による被害防止試験を平成9年度から3ヵ年取り組んだ。

鳥類の発生経過

カンキツ園周辺部でのヒヨドリの数は、4月中旬から9月末までは少ないが、10月に入ると数十～数百羽の群れ(渡り個体)が飛来して急増し、その後4月まで密度の高い状態が続く(図1)。

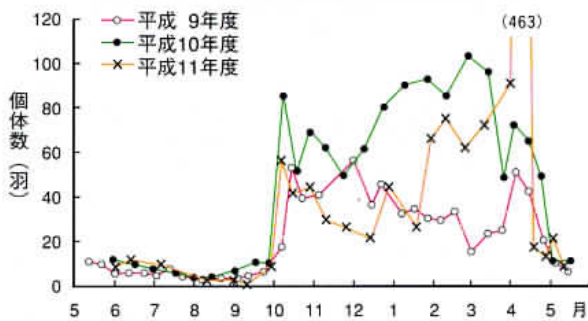


図1 果樹園および周辺部におけるヒヨドリの個体数の推移 (松山市 下伊台町)

ヒヨドリによるカンキツの被害は、10月の極早生ウンシュウから始まって、3月の清見の収穫前まで続くが、この被害は主に“渡り個体”によるものと考えられる。被害の多少は、群れの密度とともに周辺樹木の果実の多少に関係している可能性が高いとみられた。

防鳥機や防鳥資材による被害防止試験

(防鳥機) ヒヨドリに対して、鳥が嫌がる音声や模様を利用した防鳥機を検討した結果、多くの防鳥機では明瞭な効果が見られなかったが、爆発音と目玉模様を利用した防鳥機は、餌場からの距離15mという設置条件で、無作動区に比べて飛来数が少なく、被害が30～40%軽減した。

(防鳥器具) 猛禽類(フクロウ)の模型設置

区は、無設置区に比べて被害が25～30%程度少なかった。餌場近くに磁石を設置した区は、餌の摂食量と餌場での滞在時間が無設置区とほとんど差が無く、ヒヨドリに対する磁石による被害防止効果はほとんど期待できないと考えられた。

(薬剤利用) メチルアントラニル酸や木酢を人工餌に直接浸漬処理した場合には、摂食忌避効果が見られたが、プラスチック容器に入れて餌の周辺部に吊り下げた処理では餌場への飛来量や被害などが無処理区と差が無く効果は低いと考えられた。

被覆資材の利用による被害防止試験

紙袋の種類(色別)では、赤、白で被害が多く、青緑では明らかに少なかった。ただし、清見では、緑系の袋を着色前に掛けると、果皮色がやや悪くなる傾向が見られた。

ポリエステル製袋は、紙袋に比べ明らかに被害が少なく、実用的と考えられた(図2)。

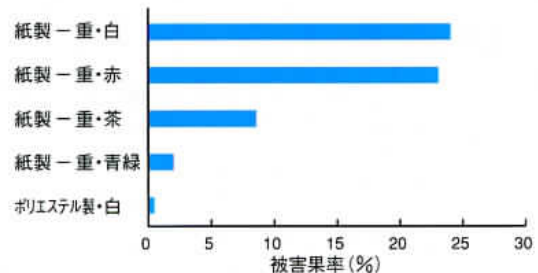


図2 果実袋の形質および色の違いが鳥の食害に及ぼす影響

ただし、防鳥機は、頻繁に使用すると“慣れ”が早まる可能性が高い。防鳥機や被覆資材は、周辺に餌場がある場合には効果がみられるが、餌場がない場合には効果が低くなる可能性が高いと考えられる。

(柑橘施設経営班 主任研究員 池内 温)

編集発行 愛媛県立果樹試験場
〒791-0112
松山市下伊台町1618
TEL 089-977-2100
FAX 089-977-2451